

KadaiDX シンポジウム 2026

やってみる 伝えてみる 続けてみる

— DX推進チームは、誰も命令されていない—

2026年7月31日（金） 香川大学

ホクレン農業協同組合連合会 管理本部 ICT推進部

主任技師 大澤 乃輔

自己紹介

Career Timeline & Profile

CAREER TIMELINE

1 1995年

ホクレン入会。農業機械の推進業務に27年間従事

2 45歳

子会社（油機サービス）へ出向。4拠点104人を統括

3 47歳

在宅勤務時代にYouTubeで独学開始

4 49歳

Power Apps でゼロからアプリ開発

5 51歳

Microsoft MVP 受賞（JAグループ初）

PROFILE

千葉大学文学部 英文専攻卒

（英語は話せません、でもPower Fxはわかります）

趣味：登山、競馬、お酒、プロレス

ハンドルネーム：dai365

奇想天外ビリビリ☆Power Apps同好会 主宰

「座右の銘：やればわかるさ」

ホクレンとは

About Hokuren Federation

1

JAグループ北海道の 経済事業連合会

北海道の農畜産物の集荷・販売
生産資材の供給
北海道農業を支えるサプライチェーン

2

7事業本部 約2,000名

農産・酪農畜産・米穀・てん菜
資材生活・管理本部・農業総合研究所
北海道内および都府県に事業所が点在

3

100のJA・27のグループ会社

道内JAの経済事業パートナー
グループ会社の経営支援
農業者の所得向上が使命

→ ホクレンとJAは運命共同体。ホクレンの変革はJAグループ全体の変革につながる

6年前のホクレン — 2020年の現実

The State of Hokuren in 2020

インフラ環境

1人1台PCはあるが
ノートPCではない

事務所内にWiFi未整備

M365導入済みだが
Outlook・Excel・Wordだけ

仕事の中身

完全なる紙文化

りん議書・申請書すべて紙

承認者の押印を前提とした業務体制

職員の知識

PCスキルが著しく低い

VLOOKUPが最先端

クラウドの良さが
全然生かされていない

これが、ホクレンの『DX以前』の姿です

しかし、ここから6年で景色は一変する

きっかけと学びの始まり

How the Learning Journey Began

2020年、コロナ禍。出勤制限と在宅勤務の中で、独学を始めた。当時の私は農機燃自総合課という子会社所管部署。

01 STEP

YouTube

OfficeTANAKA
はじめてのPower Appsを視聴

「入力→計算→出力」に衝撃を受ける
M365を即座に契約したが、アプリは残骸
の山

02 STEP

Excel相談会

事業本部の課単位に11回開催

自分が講師。VLOOKUPしか知らないのに（笑）

03 STEP

情報発信

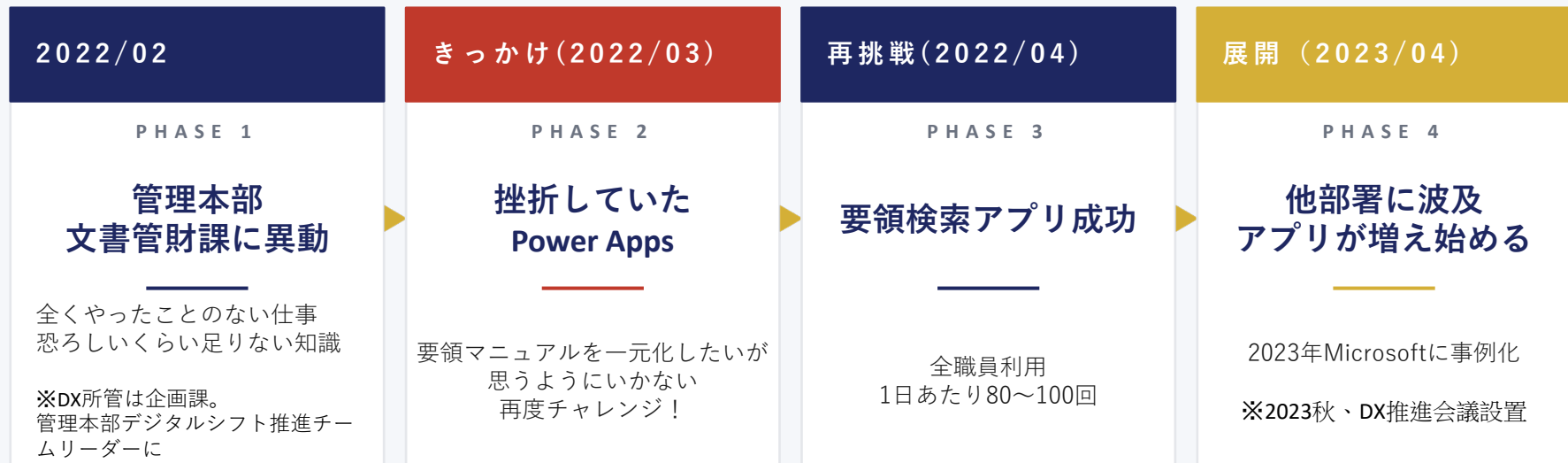
内部通信を自主的に発信

どんな些細な知識でも共有してみた

まず自分でやる。背中を見せる。それが「Volume 0（ゼロ巻）」

転機 — Power Apps との出会い

The Turning Point



素人から何度も躓きました、だからこそ躓く人の気持ちがわかる。それが「伴走型支援」の原点

デジタルシフト相談会の軌跡

Trajectory of Digital Shift Consultations



デジタルシフト相談会累計 **83回** | 課題収集 **800件超** | 他研修も実施して参加 **延べ8,300名超**

巡目ごとに課題の質が変わる — 「教えたのではない。一緒にやっただけ」

一人ずつ、火をつけた。

1on1という、最小単位の伴走。

50+

名と、一人ずつ。(正確には覚えていない)

10階のミーティングルームで、
その場で画面を開き、一緒に作り、
できるまで伴走する。

火をつけた、3つの口癖

「10階にいるよ」

— 居場所を示す

「今でもいいよ」

— 心理的ハードルを下げる

「善は急げだ」

— その場で着手する

相談会で気づいた人が、1on1で火がついた。相談会は塾、1on1は家庭教師。

伴走の「型」 — 塾と家庭教師

再現性の核。どの組織でも使えるフレームワーク。

塾 = 相談会 1回20～30名

役割：気づきを与える

- ▶ 課題を聞く
- ▶ 全体に見せる
- ▶ 刺激し合う

「こんなことができるんだ」

家庭教師 = 1on1 1対1

役割：背中を押す

- ▶ 隣に座る
- ▶ 一緒に作る
- ▶ 心理に寄り添う

「ここがわからない」

自走 自分で改修・自分で展開・次の人に教える
「自分でできた！」 — 手を離す

0週
不安

3週
形が見える

6週
楽しくなる

9週
試用開始

12週
自走

技術より“心理”が大事。目がキラッと輝き出したら、もう大丈夫。その人は自走する。

170名の真実

The Truth of 170

170

名のDX推進チーム

全員が自分の意志で手を挙げた

強制ゼロ

2024年 ICT推進部が発足しデジタル推進課新設
(8名・全員非IT出身)

ACTIVITIES

- DX推進会議（2023年設置）の下部組織として発足
- 2025年12月に異例の手上げ方式として募集
当初120名手上げ、その後追加募集し今の人数に
- キックオフ会議、事例共有会、DXランチラジオ等の活動開始
- 希望者は育成プログラム受講可能（キカガク for business）
- 年齢・職位・デジタルスキル不問、完全自発参加

命令なし、辞令なし、手当なし、あるものはやりたい変えたいという気持ち

ホクレンDX KPIダッシュボード — 量から質へ

16の指標で全社DXの到達点を畳みかける

170名+

DX推進チーム

100名+

市民開発者

83回+

デジタルシフト相談会

50名+

1on1伴走

組織・人材

People

2023 Microsoft事例
2026 kintone事例

DX事例

400+

RPAシナリオ

32,062h

RPA年間削減時間

85.6%+

Copilot利用率

アプリ・ツール

Apps & Tools

99.6%

Teams活用率

95%

ドローン工数削減

▼53.3%

ペーパーレス

800+

収集課題数

業務成果

Outcomes

2024.12認定

DX認定、JA連合会で初

19JA+

JA巡回

5回開催

JA-DXセミナー

160名

セミナー参加者平均

外部評価

Recognition

数字は結果であって目的ではない — 一人ひとりの「やってみよう」が、この数字を作った

経営層が見ている景色

The View from the Top

会長

「効率化で止まるな。事業成長に転換せよ」

「DXのX（トランスフォーメーション＝変革）が重要」

「現状維持は後退である」

専務

「組織風土・人の思考を変えよう」

「DX推進チームが先陣をきって組織風土を変えてほしい」

トップの理解と後押しがあつてこそ。感謝しかありません。

DX推進の設計図 ～ホクレンがこれから目指すもの～

DX Blueprint

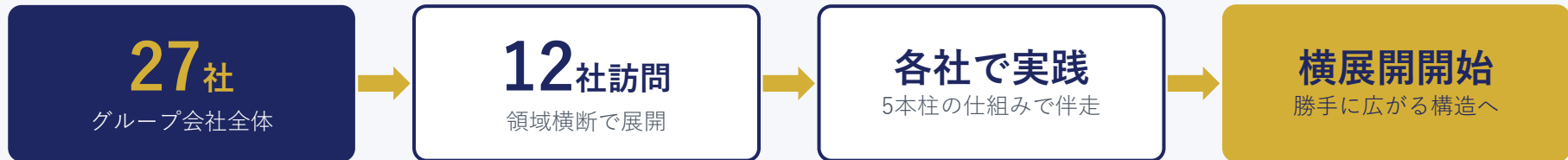


「やられるDX」から「自ら仕掛けるDX」へ

相談会（気づく）→ 伴走（作る）→ 自走（広げる）の3ステップ

グループ会社伴走支援 — ホクレンの知見をグループの資産に

現場起点のDXが、グループ全体へ広がり始めている



5 PILLARS / 5本の柱（仕組み化）

DX通信 → 研修 → アンケート → 個別フォロー → 成功事例共有

HORIZONTAL EXPANSION / グループ会社へ広がる動き

複数社でテーマ立ち上げ

各社で独自のDX推進テーマが立ち上がり始めている

内製化の動き

社内でツール活用・業務改善の内製化が始まりつつある

業種を越えた共通解

商社・製造・物流・サービス・IT — 業種を問わず通用する型に

「ホクレンがやってきたことをグループ会社に共有し、個社の成功事例をグループ全体の資産にしていこう」

三者体制 — 相互扶助のDX

関係する3組織が連携 — JAグループだからこそ生まれた構造

ホクレン 技術・実装	JA北海道中央会 制度・調整	JA北海道情報センター 基盤
・ Copilot/Power Apps/kintoneのデモ実演 ・ 研修等の伴走支援 ・ 事例蓄積と発信 「見せて、一緒に作って、火をつける」	・ JA向け案内文書の作成・送付 ・ 組合長・常務への事前説明、巡回日程調整 ・ 監督指針・ガイドラインとの整合 ・ 全国研究会での報告窓口 「中央会がいるから扉が開く」	・ JA既存システム基盤の把握 ・ インフラ技術支援 ・ 既存ワークフロー等との整合確認 「地に足をつけるのが情報センター」

WHY THESE THREE — 一つだけでは回らない理由

3者揃うと：扉を開け（中央会）→ 見せて火をつけ（ホクレン）→ 地に足をつける（情報センター）

実績：R7年度19JA巡回 / JA-DXセミナー第5回（7/29） / 関心のあるJAに3者で訪問 / 個々のJAの悩みに伴走支援

「誰かに頼んだのではなく、JAグループの中から、自然に生まれた。」
あるのは「JAグループを変えたい」という意志だけ。 — これが相互扶助のDX。

JA-DX推進研究会を起点に、全国のJAへ広がる実践の輪

From one study group to a nationwide JA-DX network

日本農業新聞

● JA-DX推進研究会を主催

2022年に発足、当初30会員が現在100名規模のJA、連合会、情報センターが参加

● 全国のJA関係者が集まる場

月1回のワークショップで学び合い
年2回の交流会で情報交換

JA-DX推進研究会

- 各地のJA・連合会・関係団体の実践者が参加

- 生成AI、Power Platform、kintone など現場で使えるデジタル活用を共有

- 所属や地域を越えて、相談し合える仲間が生まれている

全中・全農

- 全国組織とも取組内容を共有

- 全国のJA-DX推進を後押し

- 研究会で生まれた実践をJAグループ全体へ広げる動きへ

NATIONWIDE NETWORK / 全国への広がり

日本農業新聞主催「JA-DX推進研究会」を起点に、地域を越えてJAグループ内の実践者がつながり、全国へ広がる動きが生まれている

「一つの研究会が、全国のJAをつなぐ実践者ネットワークへと育ち始めている。」

組織を変えようとしなかった

Not Trying to Change the Organization

一般的なDX推進

- 上司を説得する
- ルールを作る
- 全社展開する
- 使わせる

VS

私が心掛けてきたDX推進

- ✓ やりたい人を見つける 上から変えない
- ✓ 小さく成功させる 自分が一番動く
- ✓ 横に伝播させる ネットワークで広げる
- ✓ 気づいたら広がっている 人材増殖モデル

「組織を動かす人」ではなく、「人が動く場を作る人」

人は自分事にならないと動かない

私たちは、新しいことをやっていない

We Are Not Doing Anything New

DXは、
地域の農家が当たり前に来てきた相互扶助を、
組織の中に取り戻すこと。

農家コミュニティで当たり前にあったこと

困ったら、聞きに行く

うまくいったら、見せに行く

隣の収穫を手伝う

手伝ってもらう

「お茶飲んでいきな」と声をかける

「困ったら言え」と背中を押す

若い人に教える

年長者から学ぶ

私たちは、農家から学んでいる。

AIと人間 — これからの協同

AI and Humans — The New Co-operation

生成AIの時代、「人にしかできないこと」の価値がさらに上がる

AIにできること

- 情報の検索・要約・翻訳
- データの分析・可視化
- ドキュメントの下書き
- コードの生成

人にしかできないこと

- 現場の痛みを知ること
- 信頼を築くこと
- 手を挙げた人を信じること
- 背中を押してあげること

AIが進化するほど、「手を挙げる人」の価値が上がる、共感こそ人の価値

これから社会に出る皆さんへ

A Message to the Students

皆さんがこれから社会に出て、新しいことをやろうとしたとき、必ずこう言われます。

「それ、意味あるの？」

「今までどおりでいいんじゃない」

そのとき、どうするか。

黙って従うか。それとも、自分で手を上げるか。

170人は、誰にも命令されずに手を挙げた人たちです。

農業協同組合は「相互扶助」で成り立っている。DXも同じ。

やればわかるさ

ご清聴ありがとうございました

大澤 乃輔 | ホクレン ICT推進部

@dai_keiba_73 | powerdaaps.hatenablog.com